

## モーツァルトに褒められた男

“弦楽四重奏曲の父”ハイドンは生涯に68曲もの四重奏曲を書いた(モーツァルトは23曲、ベートーヴェン\*は16曲)。数の上からいえば断然ほかの作曲家を引き離しているように見える。だから“父”なのだ、ということなのかといえば、それがそうではない。上には上があるもので、ほぼ同じ時期に活躍したイタリア人カンビーニ(Giuseppe Maria Cambini 1747-1825)は、なんと149曲もの弦楽四重奏曲に110曲以上もの弦楽五重奏曲を書き残しているのである。数からいえばハイドンは足もとにも及ばない。しかもその作品は内容のきばえもなかなかのものなのである。モーツァルトは滅多な事には他人の作品を褒めない人間であったが、カンビーニのことは褒めているのだ。

1778年、22歳のモーツァルトはパリに滞在中で、売れっ子のカンビーニに会ってそのことを父親に手紙で報告した。

「彼(カンビーニ)は四重奏曲を書いています。そのうちの1曲を私はマンハイム滞在中に聴いたことがありました。それはなかなかきれいな(recht hübsch)曲でした。だから彼を前で褒めてやり、その曲の最初のところを弾いてみせました。すると一緒にいた連中が黙っていません。その続きをやれというのです。結局私はぜんぶ弾いて見せました。するとカンビーニはびっくり仰天して「こいつはなんとという偉大な頭なんだ(Questa è una gran testa)」と言いました。」(1778年5月1日付 父親宛の手紙)

これによると、モーツァルトは何ヶ月か前にマンハイムで一度聴いただけのカンビーニの四重奏曲のことをソラで覚えていて、それを本人の前で演奏して見せたというのだから、相手は仰天した。しかしモーツァルトにしてみれば、そんなことは朝飯前のことだった。彼は14歳のときに、ローマで、ヴァチカンの聖歌隊が門外不出の秘曲としているアレグリのミゼレーレという9声の二重合唱の曲を聴き、宿に戻ると、そのミゼレーレを全曲さらさらと譜面にしてしまったという神技の持主である。時の法王クレメンス14世はいたく感心して“金の拍車”勲章を贈ったものである。

そのモーツァルトに褒められた弦楽四重奏曲の王者カンビーニ。今では忘れられた存在となっているが、なぜなのだろう。それとも全く忘れ去られていたヴィヴァルディが1950年代に爆発的にヒットしたようなことが彼の上にも起こるのだろうか。

\*この表記については、石井宏著「ベートーヴェンとベートーヴェン―神話の終り」(七つ森書館)をご参照ください。

石井 宏(音楽評論家)

1930年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004年、『反音楽史 さらば、ベートーヴェン』(新潮社)で山本七平賞を受賞。